

1980年度児童文化財研究文献の総合化と体系的分析

児童文化財研究部会 分担研究者 中山 茂

児童文化財に関する研究のうち、大学、研究所などの紀要に発表されたものは、関係者でも目にふれることが少ないと思われる。そこで一般の図書や雑誌にみられたものと併せて一覧にすることができれば便利であろうと思ひ、本稿をまとめることとした。今回は5回目である。

児童文化財の研究といっても、範囲も広いし角度もさまざまであるが、ここでは、児童文化財が子どもの生活とかかわりあうところに焦点をあてたものに限ることとした。それとて、明確に線をひくことはできないのであるが、心理学や社会学、教育学、歴史などの専門領域としての理論や技術の研究が中心になっているものとか、文学論、作家論、作品論といったような専門的研究は敬遠することとし、専門的なものでも、児童文化の理解のたすけになると思われる史的概観、現状概観などを内容とするものはとり入れることとした。また、図書や雑誌については、講座、随筆などに類すると思われるものも敬遠することにした。

対象としたのは、1980年中に刊行された図書、雑誌、研究紀要を主とし、研究紀要は日本総合愛育研究所または同所児童文化財研究部会あてに寄贈されたもののうち、児童文化関係の学科をもつと思われる大学、短期大学等のもの86冊について調査した。図書、雑誌については出版関係誌を手がかりに調査し購入するよう努力した。

寄贈者の御好意に感謝するとともに、前記のような考え方で割愛した文献の多いことについてお許しを乞う次第である。

研究内容は、一般、絵画、音楽・うた、劇・お話、児童図書・児童文学、遊び、玩具、テレビの8項目に分けて紹介するのを通例としてきたが、今回は絵画に関するものがなかったため、7項目となっている。

1. 一般

日本の子どもたち——生活と意識——NHK放送世論調査所編（日本放送出版協会、1980—8）

小学6年生900人、中学2年生900人、合計1,800人を対象として、子どもと両親の両方に対し質問調査したもので、調査時期は1979年8月である。内容は、「子ども

たちの生活」「子どもたちのものの考え方」「現代の親子関係」「地域差・学年差・男女差」「子どもたちの特徴とその背景」にわかれており、テレビ視聴その他の遊びが生活や親子関係の中でどう考えられ行われているかがわかる。

児童館における文化財利用の活動状況に関する調査報告——日本総合愛育研究所児童文化財研究部会（日本総合愛育研究所紀要第15集、1980—3）

児童福祉施設としての児童館は、だいたい大型、中型、小型の3つに分けて考えられているが、22館について活動内容を調査し、平均的な傾向を把握しようとしたものである。なお、事例研究として各型の館から代表的なものについて、環境条件や運営上の特色などについてくわしく報告している。

子ども学——佐野美津男著（農山漁村文化協会、1980—5）

「子どもを対象とするさまざまな分野の総合化」「子どもそのものに即した研究」「体験主義の排除」ということを重点として、総合的な子ども研究の学問体系の確立を提言している。「子ども学」という名称を用いているのは、「児童」ということばが、社会制度の中でいろいろに定義されていて、意味が不安定であるので、文化的なことばである「子ども」といういい方にするといっている。

「児童文化」原論——児童文化とは何か（最終回）——古田足日（『現代教育科学』No.278、1980—3；明治図書）

1979—4から1980—3まで12回連載した記事の最終回で、それまでに児童文化論に関する多くの書の要点について分析し、研究についての提言をするとともに、ここで、今までの児童文化論をさらに拡大進展させて「子どもと文化との関係を体系的に研究する」「児童文化原論」ともいうべきものを提言している。

児童文化の現状と課題——小林剛（『青少年問題』第27巻第11号、1980—11、東京都千代田区西神田2-4-1）

児童文化の現状は、子どもの発達との関係を考えるときはどういう問題があるのかを指摘し、児童文化財の画一化から脱出し、伝承児童文化の継承と、創造的な子ども

もの遊びの展開などのために、現在の児童文化財の再検討と総合的視点からの児童文化運動の展開の必要性を強調している。

2. 音楽・うた

日本童謡集——河内純・小島美子著（音楽之友社、1980—4）

はおとなたちが、自分が子どもの頃楽しんだ歌が、音楽史や子どもの歴史に照らしてみるとどういう性質をもっているかを解明し、過去の作品としての童謡を分類して提示し、このような歌をいまの子どもに押しつけてはいけない、いまはもっと子どもにふさわしい歌がたくさんあるといっている。おとなが子どものころに示された歌のうちいまも歌われているものが多いことも事実である。

3. 劇・お話

幼児の劇的表現について（保育現場からの私見）——広岡 剛（大阪千代田短期大学紀要第9号、1980—7）

ここで劇的表現というのは、身振り表現からごっこ遊び、リズム劇、劇あそび、幼児劇としてまとめて上演するまでの、幼児の劇的表現の一切を含めている。筆者は、その長年の保育体験を通して、それぞれの段階において、どういう点に意義をみとめ、どういう点に留意して指導し、子どもたちがどのように発達したかをまとめたもので、劇の脚本を子どもたちにおしつけ、さるしばいをさせることの無意味なことを指摘している。

4. 児童図書・児童文学

幼児の成長発達と絵本——0歳から3歳を迎えるまで——木下逸枝著（高文堂出版社、1979—9）

教師である著者が、長女（1975—5生れ）の絵本に関する記録をまとめたもので、「成長に伴う絵本とのかかわりあい」「ある1冊の本とのかかわりあいの過程」「言葉・文字・数などについて、どのようにして獲得していったか」の3つにわけて述べている。そして、その体験を総合して、絵本と幼児とのかかわりあいをどう理解すべきかについてのべている。また、わが国における絵本の前史をまとめた松原醇子（鳥取女子短期大学研究紀要第9号、1980—11）は、わが国の絵本と子どもとのかかわりを辿っている。おとなの絵入り経典から、上流社会にだけにあつた絵巻物が、12世紀以後は説話や寺社縁起を語るために利用され、14世紀から伝達手段として活用されるようになり、奈良絵本

で冊子形式となり、子どもとのかかわりをもちはじめるまでの歴史を概観している。

日本漫画史（上巻、下巻）——斎藤寅次郎著（大月書店、上1979—6、下1979—10）

漫画という言葉が、現在のような意味で出まわったのは1899年、北沢楽天の「時事漫画」以後である。子ども漫画の実体は、明治のポンチ絵時代までさかのぼることができ、集中的に出はじめたのは1920年代の「正チャンの冒険」あたりからで、昭和初期には「のらくろ」が登場する。上・下巻を通して現代までの漫画の変遷と時代背景、テレビ番組との関係などはひろくのべられている。

5. 遊 び

児童遊文化史——考現に基づく考証的研究（全4巻、別巻）——半沢敏郎著（東京書籍、1980—6）

20,926人について、子ども時代の遊びの名称、遊び方、遊具などを質問紙法により調査して、わが国における伝承遊びの実体を、明治、大正、昭和前期、昭和後期、各県別に把握した、ぼう大な調査結果の分析報告とそのまとめとしての児童文化論がのべられている。別巻は、それら遊びの実態を示す写真、絵、図と総合索引からなっている。

遊びは前記時代別に、一般の遊び（四季各々に）、行事的遊びに分類され、一覧表となり、日本列島遊び地図として示されている。遊びのうち、代表的なもの50種について、「名称」「場所」「遊具」「形式と方法」「史的考察」の5項目にわたって解説される。日本の子どもの遊び（上・下）——かこさとし（加古里子）著（青木書店、上1979—10、下1980—7）

日本の子どもの遊びにはどんなものがあるか、それはどんな内容なのか、それは子どもにとってどういう利益をもたらすものであるか、それは現在どうなっているか、遊ばれなくなったとしたら何故なのか、それでいいのか、どうすれば問題が解決されるのか、など実に多角的な視点で日本の子どもの遊びを解明し、著者の考えをのべている。

上巻では、遊びの種類ごとに、その内容と効果、問題点をあきらかにしている。下巻では、遊びとは何かという一般理論をすすめながら、子どもの遊びの現状に関する問題点の指摘と、その解決策の提言とが行われている。大人は子どもと遊びという共通点を持ちながら、異なる生活をしているので大人は自らの遊びを通じて火生を豊かにし、かつ子どもの遊びを通じて子どもの成長とはかるべきである。

子どもたちの言葉遊び——角田巖（文教大学人間科学部
「人間科学研究」第2号，1980—12）

わが国では、早口言葉や謎のようにおとなから借用してきた遊びのほかは、わらべ歌、絵かき歌、はやしことばなどが子どもの遊びとして記録されているだけなので、子どもの言葉遊びとして体系的にまとめようとしたものである。分析すると10種類の遊びにわけられるが、これらは遊び集団の弱体化と遊び喪失などで衰退するから、大人の遊びの提示などが必要である。

6. 玩具

おもちゃの文化史——A・フレイザー著・和久洋三監訳、
和久明生・菊島章子訳（玉川学園出版部，1980—11）
製品となっている玩具で、現在確認できるものについて、詳細な史的解説を行なったのであるが、原著だけでは、日本の現実の理解が不足するので、「日本のおもちゃ」という添付資料で種類別の解説と原著の参照頁とを記したほか、監訳者の「おもちゃ私論くあとがきにかえて」で理論的な補足が行われている。

7. テレビ

幼児の生活時間とテレビ——原 芳男（放送文化基金編
「幼少年期とテレビ」，1980—2，東京都渋谷区宇田川
町41-1 共同ビル，財団法人放送文化基金）

放送文化基金の助成によって行なわれた調査の報告で、報告会における報告を編集したもの的一部である。テレビ視聴は一つの選択行動であるという視点から、高層住宅に住む幼児の遊び行動をテレビ視聴と関連づけて調査したものである。子どもの好きなのは外での遊びであり、屋内の遊びでもテレビを見るのが一番好きなわけではない。それにもかかわらず、幼児は平均で129分、長いのは「ながら視聴」も入れると460分もテレビを見、母がよくテレビを見ると子どももよくテレビを見る、など、いろいろな傾向がわかり、テレビと生活との相関の問題点を考えさせられる。

両親のテレビ観・視聴態度と幼児——白井常（「幼少年期とテレビ」前掲）

前掲と同様の調査の報告であるが、この調査では、東京都内の山手の管理職専門職家庭の幼児と下町の商工業地区の自営業や勤労者家庭の幼児を調査して、地域や家庭の条件により、両親や幼児のテレビ視聴に傾向の差が見られるかどうかを知らうとしたものである。低年齢ほど視聴時間が長く、親子両方の視聴時間も同様の傾向がみられる。子どもの視聴について制限をしたりするのも

下町の方がゆるやかであるという結果が出ている。

テレビCMと子ども——片岡輝（「幼少年期とテレビ」
前掲）

テレビCMと子どもに関する、アメリカや日本の研究を総合してまとめた結果の報告である。子どもは1日80本、25分のCMを見ているが、年長の子はCMを批判的にうけとめることができる。CMで手に入れた商品に失望してテレビCMを信頼しない子どもが多い。子どもは景品つきとか、自分の好きなタレントが宣伝するホストセリングに弱いということもわかったが、大人が心配するよりも適当にCMを利用している。しかし、やはりCMを批判する第三者機関が生まれることがのぞまれる。

幼児の生活とテレビ——NHK放送世論調査所実態調査より（「子どもの文化」第12巻第3号，1980—3，東京都豊島区目白3-2-8 子どもの文化研究所）

NHK世論調査所が3月に発表した調査結果の速報で、調査所では幼児の生活とテレビに関する総合的な報告を1981年度で出版することになっている。この調査の対象は、首都圏の母と子であるが、生後4～7カ月で3分の2はテレビに関心をもち、1歳になると無関心はなくなり、1歳の前半で習慣的視聴がはじまり、3歳の前半で過半数になるという。「体操などを見て手足を動かす」のは、1歳半で8割を越え、それから約1年おくらせて「歌のまね」「言葉のまね」がでてくるという。視聴時間その他母親の態度と相関するのは、前出の調査と同様な傾向がみられる。

終わりに

今年後は児童文化財の側から子どもの生活とのかかわりあいのみというよりも、子どもの生活が児童文化財とのかかわりあいにおいてどうなっているかという視点からの研究文献が多いようであった。この傾向は、昨年度に接した文献の傾向からも察しられたところであった。遊びやテレビに関する研究文献の内容からも、子どもの生活や児童文化の本質についてさらに考究すべきことを示唆されているし、児童文化一般の理論に関する文献からは、もちろん、さらに広く、深く研究すべき必要のある問題と方向について示唆されるところがあったと思う。今後、さらにこの方面について、さらに一歩を進めた研究文献に多く接することができることを願っている。

なお、上記の各文献について、もうすこしくわしい紹介は、別に刊行される、朝日生命厚生事業団の研究報告のなかに含まれている。